

審査講評

審査委員

中山 英之 建築家・東京藝術大学准教授

ガラスは様々な固有の物性を持った素材ですが、同時に「ガラスの心臓」や「ガラス張りの政治」といった言葉があるように、イメージ喚起力の強い素材でもあります。今回、相次ぐ震災に感応した作品が上位2作を占めたのは偶然でしたが、ガラスの国境フェンスを提案した中原・畑案や、都心の木造建築密集地域をまるごとガラス質でコートする池川案など、課題文にうたわれた「社会」を直截に受け止めた提案に、物性とイメージの両面からガラスの特質を引き出す良案が多かったことに、頼もしさと希望を感じました。

審査委員

大浴 成一 日本電気硝子株式会社 執行役員
コンシューマーガラス事業本部 本部長

応募いただいた作品はガラス質の特長を良く研究され、CG技術にも優れた作品が多く、応募者の皆様方の熱意と努力を強く感じながら審査させていただきました。なかでも最優秀賞の原田作品、優秀賞の廣田作品は、「震災対策」という大命題のもとに犠牲になっている景観や、建築の意匠性、心地よさを、言い換えれば“強さ”を求めがゆえに置き去りにされている“しなやかさ”を共存させようという革新的な提案でありました。今後もこの空間デザイン・コンペティションを通じて、ガラス建材の新たな可能性を発見できることに期待するとともに、受賞者の皆様方がこの受賞を足掛かりにご活躍されることを祈念いたします。

審査委員

永山 祐子 建築家

特に目を引いた作品はガラスという材質の特性を使いながら現状の社会の中にある少しネガティブとも言える風景に対して希望ある絵を見せてくれる作品だった。大賞案は防波堤の風景をガラスブロックにより、美しい情景に変えていた。木密地域全体に薄板ガラスを幔幕のように張り巡らし新しい場を作る提案、同じく木密地域の住宅外壁をガラスでコーティングし耐火性能を上げるアイデアなど、そんな風景を想像すると未来が少し明るく感じた。

コーディネーター

五十嵐 太郎 建築批評家・東北大学教授

今回のテーマを設定するときは審査委員長の小嶋一浩氏も交えて、全員で内容を議論したが、10月に亡くなられたため、3名の審査員によって各賞を決定した。素材の性能から社会のあり方までを射程に含む難しいテーマゆえに、学生よりも社会人の応募が目立ったが、ポスト3.11の現代的な意義をもった最優秀案と優秀案が選ばれた。武骨になりがちな風景に詩的なイメージを与えている。8つの入選案も、ガラスの可能性を広げながら、魅力的な空間のイメージをいずれも提示していた。

第23回空間デザイン・コンペティション受賞コメント 最優秀賞 原田 雄次

私は、現在南米チリに設計活動の拠点を置いております。チリという国はまさに地球の裏側に位置し、時差12時間、また世界中のどこを経由しても飛行機でおよそ30時間かかります。そして、実は飛行機よりも速くこの2点を結ぶものがあります。それは津波です。2011年の東日本大震災の時は日本からチリへ、そして2010年のチリ南部大地震の時にはチリから日本へ。約22時間半の時間を要して互いに津波を送りあいました。

そういう意味では今回の私の「ガラスの防潮堤」という提案は日本人としての陸から海への視点、そして、チリにおける異邦人としての海から陸への視点。そのふたつの境界線のデザインと言えるのではないかと思います。

私事ではありますが、小さいころから海の近くで育ってきた私にとっては街と海というものは互いに切り離されたものではなく、それらは視覚的に、あるいは身体的に連続した環境として記憶されています。それに対して現在東北の海岸に築かれつつあるコンクリートの防潮堤はあまりに暴力的な存在に感じられました。しかし、同時にそのソリッドな彫刻的佇まいに毅然とした美しさを感じたのもまた事実なのです。そこで街と海との連続性を確保しつつ物質的な防御性を兼ね備える素材としてガラスを用いてこの防潮堤を作れば、街と海との新しい関係性が生まれるのではないかと考えたのが今回の「ガラスの防潮堤」というアイデアの発端だったように思います。

そして、今回のコンペに参加するモチベーションのひとつに審査委員に小嶋一浩先生が名を連ねていたことも大きかったように思います。

私は、横浜国立大学出身なのですが小嶋一浩先生には直接教わったわけではありません。しかし、大学のワークショップで先生がチリやブラジルにいらしたときにお会いして、ワインやカイピリーニャを酌み交わしながら色々とお話を伺いました。そういう意味では小嶋一浩先生は、私にとって「南米で出会った日本の偉大な建築家」という不思議な存在でした。

実は、今回のガラスで防潮堤を作るというアイデアを思い付いたまでは良かったのですが、文字通り垂直なガラスの壁をスタディしてみるとそれは相変わらず暴力的な建ち方をしているように感じられました。それからいろいろと平面的なスタディを繰り返しているうちにひとつのパターンを思い出しました。それは小嶋一浩先生と一緒に歩いたリオのコパカバーナビーチのプロムナードのパターンです。

ブラジルのランドスケープアーキテクト：ロバート・ブール・マルクスがデザインした有機的な模様です。そして、このパターンをモチーフに3次元的なスタディを加え最終的なアイデアにまとめ上げました。

そういう意味では、今回のアイデアの中には小嶋一浩先生との南米の思い出をこっそりと詰め込んだつもりです。残念ながらその思いは小嶋一浩先生の目に直接届くことはありませんでしたが、それでも今回は最優秀賞という素晴らしい賞をいただき、天国の小嶋一浩先生に良い報告ができたと思います。

またこの度は私の案を選出してくださいました審査委員の方々、そしてこのような素晴らしい機会を設けてくださいました日本電気硝子株式会社の関係者の皆様に改めて感謝を申し上げます。